

令和 7 年 6 月 30 日現在

機関番号：32401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2024

課題番号：20K00551

研究課題名（和文）在日コリアンおよび在樺コリアンにおける言語接触・方言接触に関する社会言語学的研究

研究課題名（英文）The sociolinguistics of language and dialect contact in Japanese Korean and Sakhalin Korean

研究代表者

吉田 さち (Yoshida, Sachi)

跡見学園女子大学・文学部・准教授

研究者番号：10587786

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の首都圏及びサハリンに在住するコリアンを対象に、祖国朝鮮半島から持ち出された朝鮮語の諸方言と日本語及びロシア語が、日本やサハリンの地で接触した結果、どのような言語的帰結が見られたのかをその過程と要因とともに明確にすることを旨とする。具体的には、サハリンのダイグロロシアと言語維持・言語交代、サハリンのロシア語に残存する朝鮮語・日本語由来の借用語、日朝露間のコードスイッチング、朝鮮語の方言接触とコイナー形成の4点について、フィールドワークで得られた多様なデータに基づき各種理論的枠組みを適用して検討した。さらに、他のディアスポラコミュニティとの比較を通して総合的分析を展開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ディアスポラ言語の方言変容に注目する研究が世界で進展しているが、首都圏及びサハリンにおいて朝鮮語の方言接触に関する研究は見当たらない。そのような状況を踏まえ、本研究では祖国朝鮮半島から持ち出された朝鮮語の諸方言と日本語及びロシア語が、日本やサハリンで接触した結果、どのような言語的帰結が見られたかをその過程と要因と伴に分析した。ディアスポラ言語における言語変化の普遍性や個別性の解明に迫り、社会言語学に新たな知見を提供した点に本研究の学術的意義がある。また、言語・方言接触による変容の研究のために収集したデータは、減りゆく二世の戦前・戦後の経験を含むため、激動の20世紀の記録という社会的意義もある。

研究成果の概要（英文）：This research project investigates contact phenomena code-switching, lexical borrowing, and koineization resulting from language and dialect contact in Korean diaspora communities in Tokyo and Sakhalin. Given the limited research on these phenomena among Korean diasporas, this study addresses an important gap. Data collection comprised: (a) five hours of spontaneous speech recordings for code-switching analysis from 16 individuals of Japanese, Korean, and mixed heritage in Sakhalin; (b) analysis of the pronunciations and meanings of 92 Japanese and 177 Korean loanwords from 256 Sakhalin residents; and (c) elicited word recordings to examine dialect contact and new dialect formation from 17 Koreans in Tokyo and 19 in Sakhalin. The findings support the applicability of Myers-Scotton's (1993) Matrix Language Frame Model, Thomason's (2001) contact-induced borrowing scale, and Trudgill's (1986) dialect contact theory.

研究分野：社会言語学

キーワード：社会言語学 言語接触 方言接触 コイナー化 コード切り替え 在日コリアン 在樺コリアン ディアスポラ

## 1. 研究開始当初の背景

サハリンはかつての日本領「樺太」であり、日本語、朝鮮語、ロシア語などの複数の言語が複雑に入り混じった地域であるため、多言語社会における「ダイグロシヤ (diglossia)」、接触言語や接触方言の形成、借用語の残存などを調査する上で最適な地域の一つであると考えられる。また、日本の首都圏は在日コリアンが関西地方に次いで多く居住しており、日本語と朝鮮語の言語接触・方言接触とそれに伴う、言語交代、コードスイッチング、コイナー化等の現象を検証するための格好の事例を提供する地域と言える。

本研究プロジェクトメンバーは、これまで在日コリアンや旧日本統治領パラオにおいて言語調査を行い、多様な角度から多言語社会における言語変化のメカニズムの解明に取り組んできた。具体的には、パラオのダイグロシヤに関する考察では「高位言語 (high language)」が日本語から英語へ交代したものの、パラオ語は「低位言語 (low language)」のまま定着していることを示し、「言語維持と言語交代 (language maintenance and shift)」に関する考察では民族によって言語交代の進行度合いに違いが見られる傾向を示した (Matsumoto 2000, 2010)。在日コリアンにおける「ドメイン (domain)」別の言語使用に関する分析では、友人との交流を含むドメインで朝鮮語が維持されやすい傾向があることを示した (吉田 2010, 2013)。パラオ語に残存する借用語に関しては、邦人移民とパラオ人との濃厚な接触に誘発され、感情を表す語彙や基礎語彙にまで日本語由来の借用語が浸透していたこと、それにより「借用語の尺度 (contact-induced borrowing scale)」(Thomason and Kaufman 1988, Thomason 2001) において「より強い接触 (カテゴリー3)」に分類され得ることを指摘した (Matsumoto 2010, 松本 2010, Matsumoto & Britain 2019)。在日コリアンニューカマーの日朝コードスイッチングに関しては、「L1 を基盤とした挿入型から、二言語がほぼ均等な役割を果たす交替型へと移行する一般的な傾向」(Singh & Backus, 2000) を支持することを明らかにした (吉田 2005)。パラオにおける日本語の方言接触と新方言形成に関しては、初期の入植者の中で多数派を占めていた東日本の方言特徴を基盤としたコイナー (接触方言) が形成されていた可能性を指摘した (Matsumoto & Britain 2003, Matsumoto 2013)。

一方、サハリンに関する社会言語学研究は、極少数の被験者を対象とした小規模の調査 (Asahi 2008, 金 2008) に留まり、実証研究と呼べるほどの体系だった調査・分析には至っていなかった。一方、在日コリアンに関する社会言語学研究の蓄積は多いものの、生野コリアンタウン等のある関西地域に集中しており (金美善 2000, 金静子 2002)、在日コリアンが二番目に多く住んでいる首都圏の研究は少なかった。また、朝鮮語から日本語への言語交代の研究 (生越 1983) やコードスイッチング (都恩珍 2000)、借用語 (金由美 2005) の研究は多数あるが、朝鮮語の方言接触に関する研究は関西を含めても見当たらなかった。さらに首都圏、サハリンいずれにおいても、戦前に移住した一世が極めて少なくなり、二世も高齢化が進む中で、彼らが移住当初に持ち込んだ言語・方言が現地でいかなる接触を経て変容してきたのかを明らかにすることは社会言語学分野において喫緊の課題になっていた。

## 2. 研究の目的

上記のような状況を踏まえ、本プロジェクトではこれまでの在日コリアンやパラオに関する研究の蓄積に、新たにサハリンに残留する朝鮮人・日本人を加えることで、「ディアスポラ言語」における言語変化の普遍性や個別性の解明に迫りたいと考えた。本研究の目的は、日本の首都圏およびサハリンに在住するコリアンディアスポラを対象に、祖国朝鮮半島から持ち出された朝鮮語の諸方言と日本語およびロシア語が、日本やサハリンの地で接触した結果、どのような言語的帰結が見られたのかをその過程と要因とともに明確にすることである。具体的には、まずは先行研究の乏しいサハリンの多言語社会の現状を把握するため、マクロな視点から、サハリンにおけるダイグロシヤの変遷と朝鮮語や日本語の維持、ロシア語への交代の状況を把握するとともに、現地サハリンのロシア語にどのような朝鮮語や日本語由来の借用語が残存しているかを究明すること、さらにミクロな視点より、日本語・朝鮮語・ロシア語の3言語間のコードスイッチングの種類や機能、パターンを記述すること、朝鮮半島から持ち出された諸方言が同時期に首都圏とサハリンの地で接触した結果、各地でどのようなコイナーが形成されていたかを解明することである。

## 3. 研究の方法

上記の ~ の研究に分けて、以下研究方法を記していく。なお、新型コロナウイルス感染症拡大という地球規模のパンデミックに見舞われ、全世界において海外渡航が停止する状態が数年にわたって続き、さらにロシアウクライナ戦争によりロシアへの入国が困難になったことから、研究開始当初の計画と実際の進め方に変更を余儀なくされた面は否めない。その反面、極めて重要であるものの、これまで未整理・未分析となっていた一次データの電子化や活字化を図ることができ、現在の研究の土台を補足・強化することができた意義は大きいと考える。その結果、分析・執筆を加速させ、一定の成果・達成度が得られた。

### 3.1 多言語社会サハリンのダイグロシヤと言語維持・言語交代

本プロジェクトでは2020年度に再度サハリンへ足を運び、より多くの朝鮮系・日系サハリン在住者より言語使用に関するデータを取集する予定であったが、海外渡航が停止されていたため、2019年に収集していた朝鮮系(9人)・日系(5人)・日朝系(2人)の二世~四世、計16名からのインタビューおよび質問票の回答を基に分析を進める。分析の枠組みとしては、世界各地でマクロな言語状況を把握するために用いられている「ダイアグロシヤ」(Ferguson 1959)や「ドメイン」(Fishman 1965)の概念を採用し、さらに分析手法としては「含意尺度 (implicational scales)」(Gal 1979)を用いる。当該コミュニティでは3言語が用いられていることから、朝鮮系と日系、それぞれの含意尺度を作成し、朝鮮語からロシア語への交代と日本語からロシア語への交代を分けて分析する。話者の年齢や世代と聞き手の世代(祖父母・両親・配偶者・同世代の友人・子供・孫)およびドメイン(家庭・友人)によって、どのような言語選択を行っているかを可視化させることで、言語維持と言語交代の進捗、およびダイグロシヤの変遷を考察する。

### 3.2. サハリンのロシア語に残存する朝鮮語・日本語由来の借用語

本プロジェクトでは、サハリンのロシア語にどのような朝鮮語・日本語由来の借用語が残存しているかを探るため、サハリン在住者を対象とするインターネットによる質問調査を実施し、256名より有効な回答を得た。その回答から抽出された朝鮮語由来の177語と日本語由来の92語について、音韻・形態統語・意味論レベルの分析を行うとともに、様々な言語の組み合わせで検証が進められている「借用語の尺度」(Thomason and Kaufman 1988, Thomason 2001)を分析の枠組みとして用い、接触度合いと借用度合いの関係を考察する。

### 3.3. ロシア語・日本語・朝鮮語間のコードスイッチング

本プロジェクトでは2020年度に再度サハリンへ足を運び、より多くの朝鮮系・日系サハリン在住者より自然談話データを取集する予定であったが、海外渡航が停止されていたため、2019年に収集していた朝鮮系(9人)・日系(5人)・日朝系(2人)の二世~四世、計16名からのインタビューおよび友人や家族との会話データを基に分析を進める。サハリン在住の多言語話者において日露・日朝・朝露・日朝露という異なる言語の組み合わせの中で、どのような言語切り替えが起こるか、またどのような機能を持つかを究明するとともに、様々な言語の組み合わせで説明力が議論されているPoplack(1980)の切り替え位置によるコードスイッチングの三分類およびMyers-Scotton(2003)「基盤言語枠組みモデル(Matrix Language Frame Model)」を分析の枠組みとして用い、サハリンの3言語の切り替えパターンへの有効性を検証する。

### 3.4. 首都圏とサハリンにおける朝鮮語の方言接触とコイネー形成

本プロジェクトでは2020年度に再度サハリンと首都圏で、より多くの話者による語彙発話および自然談話データを収録する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大により高齢者と面談することが躊躇われた。そのため、2019年にサハリンで収集していた朝鮮系(13人)・日朝系(2人)・朝鮮人の配偶者を持つ日系(1人)の二世~四世、計16名と、同年に首都圏で収録していた慶尚道出身者の二世(9人)からの語彙発話および談話データ(インタビューおよび友人や家族との会話データ)を基に分析を進める。

祖国では必ずしも隣り合っていなかった諸方言がディアスポラ社会で接触しコイネーが形成されていく過程についてはTrudgill(2004)、Britain(2018)が「方言接触論(Dialect Contact Theory)」として整理し、また初期移住者の方言や現地で競合する他言語の影響に関してはMufwene(2001)の「創始者効果(Founder Principle)」、「フィーチャープール(feature pool)」という概念を提唱し、様々な移住地でその有用性が検証されている。本研究ではこうした理論的枠組みを採用し、祖国からもたらされた朝鮮語の諸方言が接触し、さらに現地語とも接触を重ねるなかで、どのような過程を経てコイネーを形成するのかについて分析する。

### 3.5. 他のディアスポラコミュニティとの比較考察

本プロジェクトによる事例研究をより包括的な研究へと展開するため、他の多言語社会との対比・比較を行い、ディアスポラな地域で観察されるダイグロシヤ、言語維持と言語交代、借用語、コードスイッチング、コイネー形成における普遍性や個別性を探求する。複数の多言語社会において上記の理論的枠組みを用いた分析結果と比較を行うことで理論の有効性・応用性を検証し、理論構築に寄与する。

## 4. 研究成果

### 4.1. 多言語社会サハリンのダイグロシヤと言語維持・言語交代に関する研究成果

含意尺度を用いた分析から、4つの重要な結果が得られた。(1)高齢者間では朝鮮語や日本語が用いられてきた家庭や友人のドメインが若者を中心にロシア語へ徐々に取って代わられており、ロシア語への言語交代が現在進行していること、(2)言語交代のスピードには民族差が見られ、日系話者の方が朝鮮系話者よりもロシア語へ交代が早く進んでいること、(3)逆を言えば、朝鮮系の間で継承語としての朝鮮語が長く維持されていること、(4)日系話者による朝鮮語使用は二世の夫婦間に限られる一方で、朝鮮系話者による日本語使用は親・夫婦・友人・子供と多様であり、話者の年齢も30代から90代までと幅広く見られることから、日本時代に定着した日本語を高位言語とするダイグロシヤが、当時、家庭や友人という本来は民族語が使用されるドメインにまで浸透していた可能性を示唆した。こうした傾向の要因として、日朝の人口規模の変遷、戦後サハリンで実施された民族語(朝鮮語)奨励政策、朝鮮系の同族結婚や家庭内での言語使用に関するfamily language policy等がある可能性を提示した。

こうした成果を「唐辛子 всё туда с собой, и 짐치 作ります 激変する言語政策に翻弄された樺太日系・朝鮮系話者の多言語使用とその可変性」(2024b)として日本言語政策学会で公表し、さらに改善したものを学術雑誌へ投稿したところである。これまで多言語社会サハリンにおけるダイグロシヤの変遷や朝鮮語・日本語の維持、ロシア語への交代に関する実証研究はなされていないため、採択されれば本稿が初めての実証研究となる。

### 4.2. サハリンのロシア語に残存する朝鮮語・日本語由来の借用語に関する研究成果

調査で得た177語の朝鮮語由来の借用語と92語の日本語由来の借用語を定性的に分析した結果、5つの重要な結果が得られた。(1)日本語由来の借用語に東北方言からの影響と朝鮮語からの影響と思われる音声変異(語中有声化)が見られること、(2)朝鮮語由来の借用語に慶尚道方言の影響と思われる音声変異(口蓋音化)が見られること、(3)本来は日本語由来の借用語であるもの(例えば、「箸」や「座布団」)が朝鮮語由来であると広く誤認されていること、(4)ロシア語の女性名詞の接尾辞(-a)が添えられ、ロシア語化が進んでいる借用語があること、(5)日本語と朝鮮語の混成語(loan-blends)および朝鮮語とロシア語の混成語が観察されたことが挙げられる。こうした現象の要因として、樺太時代

には東北や北海道出身者が入植者の多数派であったこと、朝鮮半島からは慶尚北道・南道の出身者が多数派であったこと、また邦人が全人口の95%を占める多数派で、朝鮮人は4%と少数派であったことを指摘した。

一方、借用語の尺度を用いた分析では、日本語由来の借用語は最も低い借用カテゴリーである「カジュアルな接触(カテゴリー1)」に分類されるが、朝鮮語由来の借用語は「より強い接触(カテゴリー3)」に分類されることを指摘した。身体部位、保育、感覚に関する基本語彙は朝鮮語からのみ採用されていることを示し、現地のロシア語に日本語よりも朝鮮語の方が浸透している傾向を提示した。この要因として、戦後、大陸から入植し多数派となったロシア人は樺太時代を経験しておらず、戦後1%未満の少数派となった日本人と接触する機会が少なかったため、日本語由来の借用語は浸透せず、一方、戦後サハリンで2番目に多い民族となった朝鮮系とは接触する機会が多いため、朝鮮語由来の借用語の方が浸透していることを指摘した。

こうした成果を国際学会「NWAVE-Asia Pacific」で「Kimchi or Chimchi: Korean dialects in contact and Russianization of Korean loanwords in Sakhalin」(Faist, Matsumoto, & Yoshida 2021)として公表(本来は2020年の開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で延期され2021年の開催となったため口頭発表と出版の順番が入れ替わった)するとともに、学術雑誌『Asian and African Languages and Linguistics』にて「Japanese and Korean loanwords in a Far East Russian variety: Human mobility and language contact in Sakhalin」(Fajst & Matsumoto 2020)として掲載された。サハリンのロシア語に残存する朝鮮語や日本語由来の借用語に関する大規模調査はこれまでなく、本論文が最初のものとなった。

### 4.3. ロシア語・日本語・朝鮮語間のコードスイッチングに関する研究成果

朝鮮系・日系サハリン在住者の談話データの分析では5つの重要な結果が得られた。(1) Poplack (1980)の切り替え位置による三分類で分析した結果、文間切り替え>文内切り替え>付加型切り替えの順で出現率が高いこと、(2) Myers-Scotton (2003)の「基盤言語枠組みモデル」を用いて分析した結果、このモデルにより80%以上のコードスイッチングを説明できること、(3)コードスイッチングの機能としては、インクルーシブ、補完、強調、臨場感、多文化アイデンティティの表出など多岐に渡っていること、(4)「話者革新(Speaker innovations)」(Milroy 1992)とみなせる4つのコードスイッチングのパターンが各年齢層で存在すること、(5)日本語/朝鮮語発話の末尾にロシア語の「? 'yes?」を挿入し付加疑問文を生成するタイプのコードスイッチングは、40歳代~90歳代まで使用が観察されたことから、進行中の「言語変化(linguistic change)」(Milroy 1992)である可能性を指摘した。

こうした結果を「多言語社会サハリンにおける日朝露間のコード切り替え 探索的研究」(吉田・松本 2024a)および「唐辛子 всё туда с собой, и 김치 作ります 激変する言語政策に翻弄された樺太日系・朝鮮系話者の多言語使用とその可変性」(吉田・松本 2024b)で公表し、さらに精緻化したものを学術雑誌へ投稿したところである。採択されれば、サハリンの多言語話者のコードスイッチングを体系的に分析した初めての学術論文となる。

### 4.4. 首都圏とサハリンにおける朝鮮語の方言接触とコイネー形成に関する研究成果

首都圏在住の慶尚道出身コリアン二世の語彙発話および談話データを分析した結果、3つの重要な結果が得られた。(1)一世がもたらした諸方言が接触した結果、方言混合が起こり、訪韓や韓国ドラマの視聴、ニューカマーとの交流等によりソウルの変異形を取り入れている話者もいること、とはいえ、(2)全体としては出身地の慶尚道方言で多数派の変異形が生き残るといふ「平準化(Leveling)」(Trudgill 1986, Britain 2018)が起きていること、(3)二世の優勢言語である日本語の発音の影響が僅かながら観察されたことを示した。

こうした結果を「在日コリアン二世の方言接触 首都圏に在住する慶尚道出身者の事例から」(吉田さち・松本和子・金延姫 2020)にて公表した。在日コリアンの朝鮮語の方言接触に関する研究はこれまで行われておらず、本稿が初めての事例研究になる。

次いで、対照社会言語学的視点から、首都圏在住の慶尚道出身コリアン二世とサハリン在住コリアンの語彙発話および談話データを分析した結果、4つの共通性と5つの独自性が得られた。共通性は以下のとおりである。(1)首都圏在住コリアンとサハリン在住コリアンに関する第一の共通性として、移民の多数派を占めた慶尚道方言の変異形が優勢であったことから、どちらの朝鮮語変種においても「平準化」が起きていた可能性があること、(2)第二の共通性として、初期の移民の多数派の方言が、首都圏およびサハリンの朝鮮語変種の基盤をなしていたことから「創始者効果」が見られる可能性があること、(3)第三の共通性として、親の出身地の変異形のみならず、他地域出身者の変異形も受容するという「方言混合」が起きていたこと、(4)第四の共通性として、/pjɔ̃nsɔ/ (便所)等の古い語彙の化石化が見られることを示した。次に、独自性に関しては、首都圏の独自性1点とサハリンの独自性の4点が観察された。(1)首都圏在住コリアンの独自性として、優勢言語である日本語からの「外来言語要素」が観察されること、サハリン在住コリアンの独自性として、(2)「方言混合」が起こり、どの話者の出身地の方言にも存在しない「中間的な方言形」が生まれていたこと、(3)四世にも朝鮮半島の食文化が継承され、それに付随する方言形 /jaŋnim/ (辛いタレ) が用いられていたこと、(4)「高麗人」(スターリン時代に沿海州から中央アジアに強制移住させられた朝鮮人)の父親を持つ話者で北朝鮮の発音の影響(語頭の/r/)が見られたこと(5)樺太時代に朝鮮語の中で使われていた日本語の単語(「便所」等)が「外来言語要素」として四世にも残っていることを示した。

こうした結果は、「在外コリアンの音節核のヴァリエーション 在日・在サハリンの対照社会言語学的考察」(吉田・松本 2022)において報告した。朝鮮語の方言接触に関する対照社会言語学的研究としては、本稿が最初の研究となる。また、本論文は、国内の日本語研究分野で影響力のある学術雑誌『日本語の研究』20巻1号の特集「2022年・2023年における日本語学会の展望」において、「社会言語・言語生活」分野で注目される研究として取り上げられた(中東 2024)。

### 4.5 他のディアスポラコミュニティとの比較考察

5 年計画の本プロジェクトを総括し、総合的な分析・研究を展開するため、他のディアスポラ社会との比較研究を織り交ぜ、次なる研究に向けての土台を整備した。

ダイグロシヤに関しては、論文「A restudy of postcolonial Palau after two decades: Changing views of multilingualism in the Pacific」(Matsumoto 2020)の中で、樺太と同時期に日本統治領にあったが、戦後は米国の信託統治を経験したパラオでも、高位言語が日本語から英語へ交代となった一方で、独立から20年以上が経過したにもかかわらず、新聞におけるパラオ語使用の容認度は低く、依然として低位言語として存続していることを指摘した。大日本帝国時代の終焉と共に、かつての外地における日本語の地位が変容したこと、朝鮮語は樺太時代、ソビエト/ロシア政権下いずれにおいても低位言語のままであるという共通性を見い出せる。国際ジャーナル『Journal of Asian Pacific Communication』に掲載された。

言語維持と言語交代に関しては、論文「The maintenance of Japanese as a heritage language in Mexico: Evidence from Japanese pre-war migrants and newcomers」(Matsumoto & Tokumasu 2022)の中で、メキシコへ渡った日系人の日本語の維持に関する研究においても同族結婚・両親との使用言語・教育機関における日本語学習歴が言語維持に影響を及ぼすことを示した。サハリンの朝鮮系話者の朝鮮語維持においても同様の傾向が見られたことは興味深い。国際ジャーナル『International Journal of the Sociology of Language』に掲載された。

借用語に関しては、総説論文「The contact varieties of Japan and the North-West Pacific」(Matsumoto & Britain 2020)の中で、サハリンにおける日本語由来の借用語が「カジュアルな接触(カテゴリ-1)」だったのに対し、同時代に同じく入植型植民地であったパラオにおける日本語由来の借用語は「より強い接触(カテゴリ-3)」であった理由が戦後の人口移動の違いに基づくことを指摘し、接触到誘発されて借用語が深くまで浸透するとする「借用語の尺度」を支持した。編著書『Routledge Handbook of Pidgin and Creole Languages』に収録された。

方言接触とコイナー形成に関しては、論文「The vernacularity of Palauan Japanese」(Matsumoto & Britain 2022)の中で、パラオにおける日本語も当時入植者によってもたらされた諸方言接間で接触が起こり、Trudgill(2004, 2011)、Britain(2018)の提唱するコイナー化のプロセスのうち、「平準化」「再編成(reallocation)」「単純化(simplification)」「複雑化(complexification)」が観察されたことを論じた。同様に、論文「Transplanted Brazilian Portuguese in Japan: Mobility, contact, and koiné formation among Latin American immigrants」(Matsumoto, Okumura & Matsuda 2024)の中で、在日南米人移民の方言接触においても「平準化」と「中間方言形(interlect form)」が観察されたことを実証的に示した。前者の論文では「創始者効果」が有効であること、後者の論文では日本語からの外来言語要素がブラジル人移民の「フィーチャープール」に現れ始めたことを報告した。在日コリアンやサハリンに残留するコリアンの方言接触にも通じる現象である。上記の論文はそれぞれ国際ジャーナル『International Journal of the Sociology of Language』と『Asia-Pacific Language Variation』に掲載された。

サハリンに残留する日系・朝鮮系話者の日本語の方言接触に関する研究も進め、2本の研究論文が学術雑誌『方言の研究』で掲載された。招待論文「樺太日本語の研究 コロニアル・コイナーの形成と変容」(松本・高田・奥村・吉田 2023)では、樺太入植者の多数派を占めていた東北や北海道出身者の方言特徴として語中有声化・語中鼻音化・語頭半有声音化を中心に分析し、(1)形成当時の樺太日本語は東北・北海道出身者の方言を基盤とするコイナーであったこと、(2)語中鼻音は三世まで、語頭半有声音は四世まで継承されていること、(3)語中有声化は朝鮮系と関連付けられる傾向にあること、(4)語中有声化を避けようとする過剰修正の結果、語中無声化や促音の挿入が生じた可能性があることを示した。

次いで、投稿論文「樺太日本語における朝鮮語・ロシア語の影響 言語接触到誘発された音声変異に関する探索的研究」(松本・高田・吉田・奥村 2024)では、東北・北海道方言を基に樺太で形成された日本語コイナーが、日本人の激減に伴い、朝鮮語やロシア語と濃厚に接触し、変容してきた姿について分析し、(1)/u/の円唇化には朝鮮語の自然習得と朝鮮語における円唇化見込(2)長母音の短母音化には日本語の自然習得とロシア語話者によるアクセント付与傾向、伴侶とのロシア語使用との関連性を見出した。短母音化の由来は複合的で、シラビーム方言的特徴を持つ東北方言を基層とする樺太日本語には短母音化が生じる土壌があり、ロシア語との接触がそれを増幅させた可能性を示唆した。戦後の言語変容の理解には、本国から持ち出された方言と現地で接触する言語それぞれの要因に加え、これらの組み合わせによる相乗効果の可能性も精査する必要があることを論じた。今後の朝鮮語の方言接触の研究にも活かしていきたい。

最後に、世界各地の日本語のディアスポラ社会で見られる様々な言語現象に関して2つの総説論文を刊行した。「Japanese in the world: The diaspora communities」(Matsumoto 2022)は編著書『Language Communities in Japan』(Oxford University Press)に収録され、「Diaspora Japanese: Transnational mobility and language contact」(Matsumoto & Britain 2022)は国際ジャーナル『International Journal of the Sociology of Language』より掲載された。朝鮮語のディアスポラ研究はまだ始まったばかりであるが、将来的にこうした総説論文へとつなげていけるように、今後は首都圏とサハリンのデータを拡充するだけでなく、対象地域を広げていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 吉田さち・松本和子	4. 巻 -
2. 論文標題 唐辛子 , cinchi 作ります 激変する言語政策に翻弄され た樺太日系・朝鮮系話者の多言語使用とその可変性 (原文の「cinchi」はハングル表記)	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本言語政策学会第26回研究大会予稿集	6. 最初と最後の頁 56-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田さち・松本和子	4. 巻 -
2. 論文標題 多言語社会サハリンにおける日朝露間のコード切り替え 探索的研究	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 シンポジウム「移動・境界・言語」/共同利用・共同研究課題「移民の継承語とエスニックアイデンティ ティに関する社会言語学的研究 (jrp000267)」2023年度第2回研究会/第34回東京移民言語フォーラム 要 旨	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kazuko Matsumoto, David Britain	4. 巻 273
2. 論文標題 The vernacularity of Palauan Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of the Sociology of Language	6. 最初と最後の頁 103-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/ijsl-2021-0010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 吉田さち・松本和子	4. 巻 57
2. 論文標題 在外コリアンの音節核のヴァリエーション 在日・在サハリンの対照社会言語学的考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 跡見学園女子大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 145-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kazuko Matsumoto, Naomi Tokumasu	4. 巻 273
2. 論文標題 The maintenance of Japanese as a heritage language in Mexico: Evidence from Japanese pre-war migrants and newcomers	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of the Sociology of Language	6. 最初と最後の頁 81-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/ijsl-2021-0008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Kazuko Matsumoto, David Britain	4. 巻 273
2. 論文標題 Diaspora Japanese: Transnational mobility and language contact	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of the Sociology of Language	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/ijsl-2021-0009	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 松本和子・高田三枝子・奥村晶子・吉田さち	4. 巻
2. 論文標題 見かけ上の時間を用いた樺太日本語方言の変異と変化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本方言研究会第113回研究発表会 発表原稿集	6. 最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本和子・吉田さち・高田三枝子・奥村晶子	4. 巻
2. 論文標題 樺太日本語方言の変容 朝鮮語・ロシア語との接触の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語学会2021年度秋季大会予稿集	6. 最初と最後の頁 7-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Fajst, Valeriya, Kazuko Matsumoto	4. 巻 14
2. 論文標題 Japanese and Korean loanwords in a Far East Russian variety: Human mobility and language contact in Sakhalin	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asian and African Languages and Linguistics	6. 最初と最後の頁 155-195
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/94522	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉田さち・松本和子・金延姫	4. 巻
2. 論文標題 在日コリアン二世の方言接触 首都圏に在住する慶尚道出身者の事例から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会言語科学会第44回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 74-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kazuko Matsumoto	4. 巻 30(1-2)
2. 論文標題 A restudy of postcolonial Palau after two decades: Changing views on multilingualism in the Pacific.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Asian Pacific Communication	6. 最初と最後の頁 34-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/japc.00044.mat	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計15件(うち招待講演 6件/うち国際学会 7件)

1. 発表者名 吉田さち・松本和子
2. 発表標題 唐辛子 , cimchi 作ります 激変する言語政策に翻弄された樺太日系・朝鮮系話者の多言語使用とその可変性 (原文の「cimchi」はハングル表記)
3. 学会等名 日本言語政策学会第26回研究大会・京都大学
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 吉田さち・松本和子
2. 発表標題 多言語社会サハリンにおける日朝露間のコード切り替え 探索的研究
3. 学会等名 シンポジウム「移動・境界・言語」 / 2023年度第2回研究会（通算第8回目） / 第34回東京移民言語フォーラム
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Kazuko Matsumoto, David Britain
2. 発表標題 What real time studies can tell us about obsolescence: The death of a Japanese colonial koine
3. 学会等名 Panel on "Investigating Obsolescence: Where are we now?" (organised by Jonathan Kasstan), ICLaVE 12, University of Vienna, Vienna, Austria. (招待講演) (国際学会) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko; Britain, David
2. 発表標題 A panel study of the obsolescence of a Pacific Japanese colonial koine.
3. 学会等名 LinguisTisch Lecture Series (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko; Britain, David
2. 発表標題 A real-time study of language obsolescence: An endangered postcolonial Japanese in the Pacific.
3. 学会等名 Sociolinguistics Symposium 24 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko; Britain, David
2. 発表標題 A moribund Japanese colonial koine in the Pacific: A panel study of language obsolescence.
3. 学会等名 Panel session on "Panel research: Methodological challenges, practices and ways forward" (organised by Isabelle Buchstaller and Karen V. Meaman), Methods in Dialectology XVII. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko
2. 発表標題 A panel study of language obsolescence: The fate of (g) in a Pacific Japanese colonial koine.
3. 学会等名 Guest lecture. Department of English, University of Bern, Switzerland. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazuko Matsumoto
2. 発表標題 Transplanted Japanese in the colonial diasporas: Dialect and language contact and obsolescence
3. 学会等名 East Asian Linguistics Workshop, Department of East Asian Languages and Cultures, Stanford University, California, USA. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田さち
2. 発表標題 在日コリアンにおける継承語の保持 二世の事例から
3. 学会等名 東京大学教養学部附属グローバルコミュニケーション研究センター トライリンガル・プログラム (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松本和子・高田三枝子・奥村晶子・吉田さち
2. 発表標題 見かけ上の時間を用いた樺太日本語方言の変異と変化
3. 学会等名 日本方言研究会 第113回研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本和子・吉田さち・高田三枝子・奥村晶子
2. 発表標題 樺太日本語方言の変容 朝鮮語・ロシア語との接触の視点から
3. 学会等名 日本語学会2021年度秋季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fajst, Valeriya, Kazuko Matsumoto and Sachi Yoshida
2. 発表標題 Kimchi or Chimchi: Korean dialects in contact and Russianization of Korean loanwords in Sakhalin
3. 学会等名 NWAV-Asia Pacific 6. National University of Singapore, Singapore. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本和子・吉田さち・奥村晶子
2. 発表標題 言語変異におけるエスニシティの役割 首都圏と極東ロシアサハリンにおける4つのディアスポラ変種の事例研究
3. 学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「移民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究」2021年度第1回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田さち・松本和子
2. 発表標題 サハリンの朝鮮語話者コミュニティにおける方言・言語接触 音節核のヴァリエーションに関する事例研究
3. 学会等名 日本地理言語学会第2回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 在日コリアン二世の方言接触 首都圏に在住する慶尚道出身者の事例から
2. 発表標題 吉田さち・松本和子・金延姫
3. 学会等名 社会言語科学会第44回
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 松本和子, 高田三枝子, 吉田さち, 奥村晶子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 292
3. 書名 方言の研究 10 (分担執筆: 「樺太日本語における朝鮮語・ロシア語の影響: 言語接触到に誘発された音声変異に関する探索的研究」 pp. 175-201)	

1. 著者名 David Britain, Kazuko Matsumoto, Praparat Promparakorn	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Institute of Modern Greek Studies	5. 総ページ数 448
3. 書名 Koine, Koines, and the Koineization of Modern Greek (Greek Language Synchrony and Diachrony 3) (pp. 172-185)	

1. 著者名 松本和子・高田三枝子・奥村晶子・吉田さち	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 方言の研究 9 (分担執筆: 「見かけ上の時間を用いた樺太日本語の研究: コロニアル・コイネーの形成と変容」 pp. 53-82)	

1. 著者名 Kazuko Matsumoto	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Oxford University Press.	5. 総ページ数 253
3. 書名 Japanese in the world: The diaspora communities. In John Maher (ed.) Language Communities in Japan. (pp. 15-30)	

1. 著者名 Kazuko Matsumoto & David Britain	4. 発行年 2020年
2. 出版社 London: Routledge	5. 総ページ数 538
3. 書名 Routledge Handbook of Pidgin and Creole Languages (Routledge Handbooks in Linguistics). (pp.106-131)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松本 和子  (Matsumoto Kazuko)  (80350239)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授    (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	久能（高田） 三枝子  (Kuno-takada Mieko)  (90468398)	大正大学・文学部・准教授    (32635)	
研究協力者	奥村 晶子  (Okumura Akiko)  (20899174)	文京学院大学・経営学部・助教    (32413)	
研究協力者	ファイスト ワレーリヤ  (Fajst Valeriya)		
研究協力者	金田 懐子  (Kaneda Eko)	東京大学・大学院総合文化研究科・大学院生    (12601)	
研究協力者	アナスタシア スヴェトロフスカヤ  (Anastasia Svetlovskaya)	東京大学・教養学部・学部生    (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ロシア連邦	サハリン国立総合大学			
スイス	ベルン大学			